

岡谷の製糸を語る

共栄工業株式会社 取締役会長
NPO 法人シルク文化協会 理事長 吉澤 英三

はじめに

岡谷の製糸を語る という演題を頂いて恐縮しております。

岡谷の製糸につきましては、岡谷蚕糸博物館紀要と言う立派な機関紙が、平成8年から毎年発行されております。編集委員長は、信州大学名誉教授で岡谷蚕糸博物館名誉館長の嶋崎昭典先生が担当され、編集委員には此の道に造詣深い優秀な皆さんが揃っていて今年も3月に第14号が発行されました。毎号すばらしい内容の機関紙であることは御出席の皆さんの御承知の通りであります。

私は養蚕農家に生れて小学生位の頃から蚕飼いの手伝いをしながら育てられ、学校では養蚕と製糸の教育を受けて、戦時中学徒動員では座繰の製糸工場に働きに行き、戦後昭和21年、製糸会社に就職して、煮繭を2年、座繰5年、織田式2年、増澤式多条繰糸機6年、たま10型自動繰糸機定粒式、日産HR自動繰糸機定織式を15年、製糸の現場を30年、その後繭を買い糸を売る、銀行からお金を借りる製糸経営を10年経験して、昭和59年金属加工の精密板金に事業転換して20年余になります。

金属加工の事業に比べて製糸業は実にむずかしい事業です。何となれば金属加工は、設備は機械メーカーから購入すれば最初の技術指導は受けられる。得意先のメーカーから注文をもらい材料を買って生産して納入すれば次の月には入金する、その繰返しが事業経営です。

製糸業は原料である繭の生産は6月～9月の4ヶ月です。

- ① 4ヶ月間に1年中操業する繭を買わなければならない。農家には現金で支払わなければならない。膨大な資金は銀行から借りなければやれない。
 - ② 製品である生糸は相場の産業で毎日値段が変動する。売る好期を決定することは大変むずかしい。
 - ③ 繭を買った時に売る生糸の原価は決ってしまうが、実際に売れる価格は、製品が出来た時となる。(相場産業)
 - ④ 繭は農産物で生産農家毎の品質差が大きい。
 - ⑤ 製糸業は原料繭代8割、加工賃2割、金属加工は原料代2割、加工賃8割、研究、対応出来る余地が非常に小さい事業です。
- ◎ 製糸業は、金属加工に比べて大変経営のむずかしい事業であります。このむずかしい事業を成功し成長させて来た製糸経営者は、実に立派だと思います。就中当地岡谷は、繭

の産地ではありません、この岡谷を世界一の製糸の街シルク岡谷に築き上げた先輩は、
実に立派だと思います。

1 養蚕、製糸の国づくりに対する貢献

徳川 260 年の鎖国の時代が終って明治政府は、欧米の文明文化を吸収、富国強兵、
殖産興業の国づくりを進めて来ました。欧米の文明、文化を吸収するとは、外国から
指導する人を雇うこと、外国の製品を輸入することすべて外貨が必要です。その外貨
を稼いだ産業が製糸業です。明治元年から太平洋戦争の始った年昭和 16 年まで 74 年
間、日本第一の輸出品は生糸でした。昭和 17 年以降はアメリカとの戦争のため生糸
輸出は出来ませんでした。今年（明治）は明治元年から 143 年目です。

表 1 横浜港輸出総額と生糸輸出額

(1円=1\$として換算)											
年別	輸出総額	生糸	%	年別	輸出総額	生糸	%	年別	輸出総額	生糸	%
1868	万\$	万\$			百万円	百万円			百万円	百万円	
明治元	1,770	995	56,2	30	91	59	61,3	13	672	597	88,8
2	908	441	48,6	31	80	42	52,4	14	901	736	81,7
3	1,133	458	40,4	32	108	63	57,8	合計	8,657	5,521	63,77
4	1,443	769	53,3	33	95	45	46,9	1年当	618	394	
5	1,404	718	51,1	34	134	75	55,8	1926			
6	1,510	705	46,7	35	139	77	55,2	昭和元	760	601	79,0
7	1,258	530	42,1	36	147	74	50,7	2	749	584	78,0
8	1,247	542	43,5	37	170	89	52,1	3	742	551	74,3
9	2,143	1,319	62,6	38	146	72	49,3	4	782	573	73,3
10	1,563	1,004	64,3	39	201	110	55,0	5	450	291	64,6
11	1,609	898	55,8	40	206	116	56,5	6	371	251	67,5
12	1,888	1,115	59,0	41	191	108	56,8	7	401	261	65,2
13	1,858	996	53,6	42	205	124	60,3	8	501	275	54,8
14	2,115	1,267	59,9	43	225	130	57,8	9	490	205	41,7
15	2,666	1,864	69,9	44	228	128	56,3	10	626	284	45,3
16	2,569	1,827	71,1	合計	3,250	1,803	55,48	11	678	297	43,7
17	2,146	1,292	60,2	1年当	74	41		12	800	308	38,4
	百万円	百万円		1912				13	681	279	41,0
18	24	13	53,8	大正元	258	150	58,1	14	951	387	40,6
19	32	17	54,4	2	317	188	59,5	15	960	331	34,5
20	34	19	57,1	3	269	161	59,7	16	634	162	25,5
21	41	26	63,6	4	306	149	48,6	合計	10,576	5,640	53,33
22	42	25	62,9	5	498	258	51,8	1年当	661	353	
23	32	14	42,3	6	667	349	52,4				
24	50	29	58,9	7	817	369	45,2	明治、大正、昭和の74年の合計			
25	62	36	58,9	8	1,019	624	61,2	計	22,483	12,964	57,66
26	55	28	51,1	9	766	383	49,9	1年当	304	175	
27	73	39	53,8	10	603	417	69,2				
28	85	48	56,5	11	895	670	74,8				
29	62	29	46,7	12	669	470	70,2				

日本製糸協会五十年史、横浜港輸出商品別順位表より作成

- (1) 明治元年～44 年輸出総額は、32 億 5000 万円、生糸輸出は 18 億 300 万円 55, 48%
- (2) 大正元年～14 年輸出総額は、86 億 5700 万円、生糸輸出は 55 億 2100 万円 63, 77%
- (3) 昭和元年～16 年まで輸出総額は、105 億 7600 万円、生糸輸出は 56 億 4000 万円 53, 33%

- (4) 明治元年より昭和16年まで74年輸出総額224億8300万円、生糸輸出は129億6400万円57, 66%です。約6割が生糸代
- (5) 羽二重、ちりめん、その他の絹織物、蚕卵紙、屑糸等絹関係が20億4600万円9, 1% 蚕糸関係合計150億円余となり、横浜輸出総額の67%となります。
- (6) 大正12年まで横浜港は、日本の生糸輸出の唯一の港でした。

表2 横浜港からの生糸輸出額及び国家予算に占める割合を御覧下さい。

表2 横浜港からの生糸輸出額及び国家予算に占める割合

(単位: 千円)

年次	国家予算	生糸予算	%	年次	国家予算	生糸輸出	%
1868 明元	30,505	9,950	32.6	1912 大元	582,040	150,000	25.8
1869 2	20,786	4,410	21.2	1913 2	594,417	188,000	31.6
1870 3	20,108	4,580	22.8	1914 3	672,195	161,000	24.0
1871 4	19,235	7,690	40.0	1915 4	727,653	149,000	20.5
1872 5	57,730	7,180	12.4	1916 5	600,938	258,000	42.9
1873 6	48,737	7,050	14.5	1917 6	730,929	349,000	47.7
1874 7	88,868	5,300	6.0	1918 7	902,373	369,000	40.9
1875 8	147,920	5,420	3.7	1919 8	1,064,190	624,000	58.6
1876 9	62,996	13,190	20.9	1920 9	1,287,924	383,000	29.7
1877 10	51,256	10,040	19.6	1921 10	1,591,287	417,000	26.2
1878 11	53,276	8,980	16.9	1922 11	1,501,486	670,000	44.6
1879 12	55,651	11,150	20.0	1923 12	1,389,354	470,000	33.8
1880 13	59,934	9,960	16.6	1924 13	1,694,285	597,000	35.2
1881 14	68,574	12,670	18.5	1925 14	1,580,462	736,000	46.6
1882 15	66,814	18,640	27.9	14年 計	14,919,533	5,521,000	37.0
1883 16	75,606	18,270	24.2	1年平均	1,065,681	394,357	
1884 17	75,983	12,920	17.0	1926 昭元	1,666,775	601,000	36.1
1885 18	56,622	13,000	23.0	1927 2	1,759,318	584,000	33.2
1886 19	74,695	17,000	22.8	1928 3	1,849,094	551,000	29.8
1887 20	79,937	19,000	23.8	1929 4	1,773,567	573,000	32.3
1888 21	80,756	26,000	32.2	1930 5	1,816,276	291,000	16.0
1889 22	76,000	26,000	34.2	5年 計	8,865,030	2,600,000	29.3
1890 23	85,071	14,000	16.5	1年平均	1,773,006	520,000	
1891 24	83,514	29,000	34.7	明治より63年 計	31,935,771	9,924,400	31.1
1892 25	85,413	36,000	42.1	1年平均	506,917	157,530	
1893 26	88,045	28,000	31.8	1931 6	1,496,854	251,000	16.8
1894 27	91,043	39,000	42.8	1932 7	2,189,975	261,000	11.9
1895 28	92,103	48,000	52.1	1933 8	2,320,504	275,000	11.9
1896 29	198,555	29,000	14.6	1934 9	2,223,776	205,000	9.2
1897 30	249,525	59,000	23.6	1935 10	2,215,414	284,000	12.8
1898 31	254,725	42,000	16.5	1936 11	2,305,574	297,000	12.9
1899 32	252,599	63,000	24.9	1937 12	3,422,136	308,000	9.0
1900 33	254,550	45,000	17.7	1938 13	3,522,361	279,000	7.9
1901 34	278,960	75,000	26.9	1939 14	4,836,636	387,000	8.0
1902 35	282,433	77,000	27.3	1940 15	6,116,828	331,000	5.4
1903 36	287,470	74,000	25.7	1941 16	8,211,077	162,000	2.0
1904 37	351,115	89,000	25.3	11年 計	38,861,135	3,040,000	7.8
1905 38	433,709	72,000	16.6	1年平均	3,532,830	276,364	
1906 39	504,962	110,000	21.8	明治より74年 計	70,796,906	12,964,400	18.3
1907 40	635,904	116,000	18.2	1年平均	956,715	175,195	
1908 41	626,788	108,000	17.2	1942 17	8,964,912	8,000	0.1
1909 42	520,488	124,000	23.8	1943 18	14,373,216	20,000	0.1
1910 43	548,250	130,000	23.7	1944 19	21,244,332	5,000	0.02
1911 44	573,997	128,000	22.3	1945 20	29,156,653	0	0.0
44年 計	8,151,208	1,803,440	22.1	1946 21	119,087,108	545,000	0.5
1年平均	185,255	40,986		1947 22	214,256,004	92,000	0.04
				1948 23	473,145,604	6,046,000	1.3
				1948 24	741,313,625	5,024,000	0.7
				1950 25	664,576,316	9,475,000	1.4

注: 1 国家予算額は、大蔵省主税局(昭和33年9月)

「明治・大正・昭和国の歳入一覧表」から抜粋

2 生糸「輸出額」は、財団法人日本関税協会「貿易統計からみた横浜の百三十年」から抜粋

3 1868年(明治元年)から(明治17年)の生糸輸出額の資料はドル表示であるため、1円=1\$として換算した。

このころの為替レートは、100\$=101.5~98.75円となっている。

日本製糸協会五十年史より作成

- (1) 明治元年～44年の国家予算は、81億5120万8千円、生糸輸出は、
18億344万円 22, 1%でした。
- (2) 大正元年～14年の国家予算は、149億1953万3千円、生糸輸出額は、
55億2100万円で37%でした。昭和5年まで63年間国家予算の31%相当を生糸
輸出で稼ぐことができました。
- (3) 昭和元年～5年までと16年までを区分して集計しました。昭和元年から5年まで
は、1年当りの生糸輸出が5億2000万円です。戦争が始った6年から16年の1
年当りは、2億7636万4千円で約半減です。更に太平洋戦争が始った17年～2
0年は、生糸輸出は0みたいなものです。戦争によって稼げなかった時代です。
私は昭和6年小学1年生です。昭和20年成人式です。20年5月頃は、立川の飛
行場で、征くだけで帰って来ない特攻隊を毎朝見送っていました。そして戦争の
ない豊かな時代、戦後を生きて来ました。平和の尊さをしみじみと痛感していま
す。

製糸の国づくりに対する貢献は、

① 日清、日露戦争に勝利したことである

イ. 日清戦争 1894年～5年（明治27年8月1日）開戦

日本は55隻6万1300トン、強力な連合艦隊があり、黄海の海戦に参加し
た兵力

清国 35,000トン 10発 307秒 艦隊速力 14,5ノット

日本 40,000トン 10発 47秒 艦隊速力 22ノット

日本軍新兵器による大勝利。生糸輸出代金担保で軍備をする。

ロ. 日露戦争 1904年～5年（明治37年～8年）

旅順港203高地の攻撃では乃木将軍は、2人の我が子が戦死。日本軍のし
かばね山をなす苦戦するも203高地を攻め落とし奉天附近の戦争で大勝利
し、東郷大将の海軍は日本26万5,000トンの戦力で、ロシアの東洋艦隊
19万2,000トンを打破りバルチック艦隊を明治38年5月27日、日本海の
海戦で大勝利する。

日本は日清戦争のあと日露戦争に備えて第1次、第2次第3次建艦計画を
立てて、総経費3億2800万円、当時1年間の総予算を上廻る建艦費を
かけて軍備を備えた。

敵に勝る戦力の軍隊があったので勝利できた。日本には生糸輸出と言う資
金があったので、外国も日本に軍艦を売ってくれた。正にシルクの勝利で
ある。

② 農村を豊にした。

農地解放前の日本の農村は、地主制度による小作人は、収穫した米の半分は小作料として地主に支払わねばならなくて大変貧乏な生活であった。養蚕で繭の売上代金が6月から10月になり現金収入の道が開けて大変生活が向上すると共に養蚕の盛んな地域は非常に豊になって来た。

2 岡谷の製糸の盛衰

絹の歴史は大変古く、中国では数千年前から絹織物のすばらしい製品がありますし、日本でも古事記(712年)日本書紀(720年)にも絹の記録があります。

諏訪地方では諏訪大社の古記録に文和3年(1354年)656年前に桑畑に税金を課した記録があつて桑に税金を課すことは、蚕が飼われていた証拠だと言われておりこれがこの地方の最も古い絹関係の史料だそうです。

諏訪地方には古くから蚕を飼ひ繭から糸を作る技術は、あつたと言われています。安政6年(1859年)(151年前)横浜が開港と共に生糸は輸出の花形商品となつて安政7年に輸出の5割以上が生糸となり、岡谷諏訪地方の糸師という生糸や繭を買い集めて生糸を商う人達の活躍の場が出来たのがシルク岡谷のはじまりとなります。

京都方面に売っていた時は値段も安く量も少なかったのですが、横浜では値段も高く、需要も多くなり、全国各地から生糸が集つて取引されるようになったのですが、急に沢山の生糸が売れるようになって、粗製乱造で品質クレームが多くなり、外国の輸入業者から日本政府にフランス、イタリアの技術、機械を導入して品質を改善するよう強い要請があり、政府では当時伊藤博文、大隈重信、渋沢栄一と言う当時の偉い人が相談して、西洋の技術を導入して国営の模範工場を造つて民間を指導して優秀な輸出生糸を造つて、外貨を稼いで文明開化を進めるために『群馬県の富岡に国営の製糸工場を造ることを決定し、明治3年

(1870年)(140年前)フランス人ブリューナーと工場建設と技術指導の契約を締結しました。

ブリューナー1行10名は、群馬県富岡に来て最初は煉瓦の焼き方から指導して赤煉瓦の建物が出来上り、ボイラー3基蒸気タービン、フランス式製糸機械を輸入して300人繰りの世界一の国営の富岡製糸工場が明治5年10月7日に操業を開始しフランス式の製糸機械による高級生糸の製造の指導が始まりました。この工場は現在富岡市に重要文化財世界遺産候補として大勢の観光客が訪れています。

国営の富岡工場の操業に相前後して民間でも西洋式の製糸工場が数社創業しました。

1. 前橋製糸所

群馬県南勢多郡岩神村

明治3年9月操業

前橋藩がイタリア式12台24人繰

2. 小野組築地製糸場 東京築地栄町
明治4年8月操業 生糸取引商人小野組 イタリア式 60人繰
3. 深山田製糸場 上諏訪地蔵時下字深山田
明治5年8月22日操業 小野組イタリア式 36人繰
4. 富岡製糸場 群馬県富岡市
明治5年10月4日操業 官立フランス式 300台
5. 松代六工社 長野県松代町
明治8年8月操業 富岡のフランス式を改造した 50人繰 松代藩
6. 中山社 岡谷市間下の資産家で糸商武居代次郎を中心に
明治8年5月操業 9人共同出資で 100人繰の工場
中山社の場所 間下の堤公園の 400m 上 中央道長野線の下
山下町2丁目の畑の中

◎ 中山社の武居代次郎は、松代六工社のフランス式、上諏訪深山田社のイタリア式を手本に工夫改良を行い、日本の実情にあって、欧州式の良い点を取り入れた製糸機械の製作に取り組み、度重なる失敗を乗り越えてフランス式を基にイタリアのケンネル式によって生糸の抱合（品質）を良くした生糸を製造出来る機械を開発した。

この機械は身近にある木材を主体とする安い材料でイタリア式でも、フランス式でもない独特の製糸機械を作りあげた。蒸気汽缶は松本の鍛冶屋に作らせた「ホオヅキ釜」煮鍋は銅ではなく半月の陶器製とした。その他すべて村の大工による木製とした。名付けて諏訪式繰糸機とした。

動力源は、塩尻峠から諏訪湖に注ぐ本沢川に仕掛けた水車にした。明治8年5月中山社 100 繰りの工場が創業しました。この木製の製糸機は、フランス式、イタリア式よりも原理的にも優れている上に建設費が格段に安い特徴がありました。

1. 釜当り建設費

富岡製糸場	662 円	(国)
松代六工社	59 円	(藩)
上諏訪深山田社	39 円	(小野組商社)
中山社	20 円	(武居代次郎 個人)

◎ 諏訪式繰糸機と岡谷

武居代次郎氏に依って開発された中山社の諏訪式繰糸機は、当時としては性能が良く、安価であったので、たちまち岡谷の製糸を志す人の間に普及し、改善され、岡谷諏訪地方の製糸の競争力を強くし、シルク岡谷の幕開けとなるのが明治10年ごろであります。

明治7年	8年	9年	10年	15年	20年	25年
5工場	9	18	30	51	65	89

◎ 製糸業発達の過程（明治時代）

明治初年の岡谷の製糸は、規模が小さく、1 工場で生産する生糸では、横浜に出荷するのに荷がまとまらず、販売も不利が多かったので、共同荷作り、共同販売をする、結社を作った。皇運社、協力社、確栄社など多くの結社ができたが中でも、明治 12 年 7 月尾沢金左衛門、林倉太郎、片倉兼太郎が発起人となり、有力製糸 18 社で結成した開明社は、共同揚返し、技術指導、原料繭の共同購入等優良生糸生産に力を入れ、10 釜、20 釜の製糸が結社を作ってそろって成長し、明治 20 年～30 年代には、200 釜、300 釜の工場になり、結社を離れて独立企業として経営を確立し更に 500 釜、600 釜の大工場となり、明治 30 年以降は岡谷は満杯の状態となり、繭の生産地に工場を新設する企業が増加して、全国各地に分工場が数多く建設されました。

平野村の生糸の生産量の推移

明治 8 年	1 4 年	1 8 年	2 4 年	2 7 年	3 6 年	昭和 3 年
1 倍	3 倍	8 倍	4 1 倍	8 0 倍	8 5 倍	6 0 0 杯

表 3 岡谷の経営者に依る生糸の生産高の推移

表 3 岡谷の経営に依る生糸生産高の推移

年別	①岡谷市 内の生産	②岡谷経営 の市外生産	③ ①+② の合計	④全国の 生産	① 岡谷市内 ④ 全国	③ 岡谷計 ④ 全国
	俵	俵	俵	俵	%	%
明治 12	166		166			
13	158		158			
16	378		378			
26	4,041		4,041			
29	5,520		5,520			
33	5,526	590	6,116	72,531	7,6	8,4
38	10,302	1,818	12,120	88,329	11,7	13,7
41	13,853	6,238	20,091	114,416	12,1	17,6
44	20,729	9,196	29,925	158,226	13,1	18,9
大正 4	25,021	21,003	46,024	205,600	12,2	22,4
7	36,913	39,165	76,078	325,933	11,3	23,3
10	34,492	71,805	106,297	392,968	8,8	27,0
13	49,866	94,127	143,993	476,004	10,5	30,3
昭和 4	56,915	103,176	160,091	661,397	8,6	24,2
5	52,908	88,584	141,492	681,732	7,8	20,2
明33～昭5 10ヶ年計	306,525	435,702	742,227	3,177,136	9,6	23,4

岡谷蚕糸博物館紀要11号、12号より作成

◎ 大正時代の製糸

大正時代はシルク岡谷の確立した時代です。

大正 3 年第 1 次世界大戦が始り以後 5 年間ヨーロッパは戦禍の中、戦争の圏外の、日本とアメリカは好景気に沸きあがった時代でした。アメリカ国内に絹の婦人服、

ストッキングの爆発的な需要が生まれ、日本の生糸の8割はアメリカに輸出されました。従って設備の新設、増設も盛んで特に市外の工場の成長が著しいです。

岡谷の製糸の釜数の推移（平野村誌下巻）

	岡谷市内	岡谷市外	計
明治40年	8,599 釜	4,104 釜	12,703 釜
昭和2年	20,641	28,324	48,965
倍率	2.40	6.90	3.85

製糸業は、生糸価格の変動の大きな相場産業故大変なものであり、大正時代も大きな変動はあるのですが、平均的には大正元年 800 円から大正 15 年 2,000 円まで起伏はあるのですが、シルク岡谷の最も良い時代でありました。岡谷の町は、どこもかしこも製糸工場と繭倉庫、従業員の寄宿舍に埋めつくされ、林立する煙突から吐き出す煙に岡谷の雀は黒いと言われたのがこの時代であります。

表 4 日本の十大製糸

日本の十大製糸は、岡谷に集中していました。

表 4 日本の十大製糸

明治44年横浜生糸入荷個数番付

順位	会社名	地域	入荷数(梱)
①	片倉製糸	岡谷	15,284
②	小口組	岡谷	8,471
③	山十組	岡谷	8,420
4	碓氷社	群馬	6,558
5	依田社	長野	6,482
⑥	岡谷製糸	岡谷	6,344
7	俊明社	長野	6,240
8	甘楽社	群馬	4,860
⑨	林組	岡谷	4,480
⑩	尾澤組	岡谷	4,326

大正14年横浜、神戸生糸入荷個数番付

順位	会社名	地域	入荷数(梱)
①	片倉製糸	岡谷	77,264
②	山十製糸	岡谷	52,856
3	郡是製糸	京都	46,237
④	小口組	岡谷	27,028
5	山丸製糸	長野	13,536
6	交水社	群馬	12,985
⑦	岡谷製糸	岡谷	12,626
8	依田社	長野	12,458
⑨	林組	岡谷	12,442
10	石川組	埼玉	12,394

岡谷蚕糸博物館紀要 12号より

明治44年6月～45年5月まで

入荷総数 283,792 梱

輸出総数 152,771 俵

岡谷6社計 42,999 梱 (15.15%)

大正14年6月～15年5月まで

入荷総個数 789,821 梱

この時の1梱=9 貫目 (33.75 kg)

岡谷5社計 182,216 梱 (23.07%)

表 5 明治以降岡谷市域の人口の推移

表 5 明治以降岡谷市域の人口の推移

平 野					湊	川岸	長地	合計
	世帯	男	女	計	計	計	計	
明治	5	970	2,281	2,215	4,496			
	10	977	2,383	2,258	4,641	1,572	2,120	10,797
	15	1,045	2,494	2,398	4,892	1,681	2,464	
	20	1,084	2,707	2,649	5,356		2,525	
	25	1,123	2,966	2,971	5,937			
	30	1,211	3,214	3,221	6,435	2,062	2,956	14,594
	36	1,403	4,073	7,257	11,330	2,207	3,264	20,229
	40	1,684	4,378	7,524	11,902	2,434	3,552	21,482
	45	2,017	6,636	6,621	13,257	2,535	3,755	23,295
大正	6	2,964	8,984	9,393	18,377	2,707	4,595	29,739
	9	4,187	12,956	31,322	44,278	4,184	12,548	64,036
	14	5,128	15,381	33,633	49,014	4,626	12,123	68,973
昭和	5	6,286	17,109	36,765	53,874	5,320	13,767	76,562
	10	6,091	15,253	26,080	41,333	4,044	10,335	59,785
	15	6,470	15,578	24,455	40,033	3,391	9,309	56,557
	22	7,179	16,189	20,302	36,491	3,461	7,872	52,000
	25	7,397	16,126	19,394	35,520	3,456	7,484	50,600
	30	7,609	16,459	19,297	35,756	3,248	7,416	50,525
	35	8,565	17,366	19,470	36,836	3,182	7,566	52,256
	40	9,614	18,168	20,531	38,699	3,327	7,923	56,986
	45	10,651	18,750	20,820	39,570	3,204	8,227	60,350
平成22年								
4月1日現在					19,688	25,641	27,180	52,821

明治25年までは、「平野村誌」による(本籍人口)。大正6年までは、「長野県統計書」等による。
大正9年以降は、「国勢調査報告」による。

岡谷の人口は明治30年代より急増しています。表3の明治30年代より増して来た生糸の生産と全く正比例しています。明治以来70余年日本の輸出の6割を支えて外貨獲得に貢献してくれたのは、15歳から30歳位の女子従業員でした。

◎ 昭和の時代の製糸業

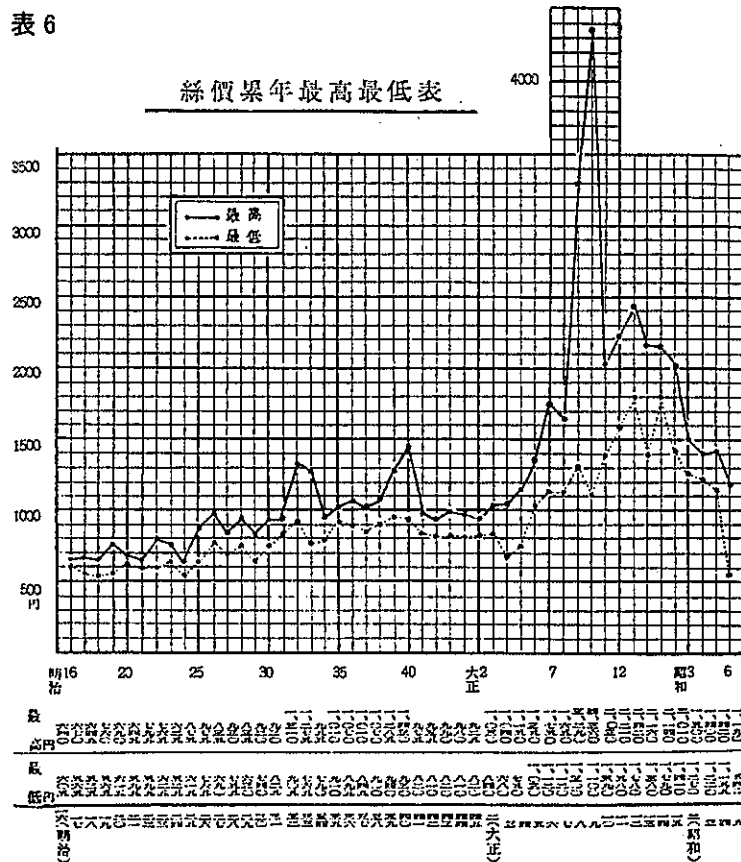
昭和5年(1929年)10月29日ニューヨークの株式の大暴落をきっかけに世界恐慌が始まりました。

日本も産業、経済の全般にわたって大打撃を受けました。倒産、失業、生活苦の深刻な生活不安が発生して、昭和恐慌と言う不景気な時代となりました。

大正9年高値4,360円もした生糸が次第に値下りして昭和5年には500円を割り、昭和7年には390円、大正の1割にもならない値下りとなりました。岡谷の製糸も大打撃をこうむり、パタパタと倒産しました。

弱りきった会社の再生をかけて、当時の十九銀行と片倉製糸紡績株式会社の社長片倉

表 6



兼太郎さんの強力な指導と支援によって、市内の有力製糸9社が参加して、丸興製糸株式会社が、昭和6年3月設立されました。又片倉組に次ぐ岡谷の最大手である山十組が昭和7年破産する悲劇も起りました。

昭和6年満州事変、昭和12年支那事変、昭和16年太平洋戦争となり、幾つかの製糸工場が軍需工場に転換し、シルク岡谷も一変しました。

昭和20年8月終戦となり、十数社の製糸工場は復元しましたが、戦後の岡谷は精密工業の町となりました。

日本の生糸輸出も昭和30年以降は、次第に減少して昭和49年（1974年）をもって終了となりました。岡谷の輸出製糸工場として戦後復元した20工場も次第に減少して輸出製糸として最後に残った味澤製糸さんが平成10年（1998年）末に廃業され大変淋しくなりましたが、近代日本を支えて来た産業シルクの火を消してはならじと岡谷では宮坂製糸さん、下諏訪で松沢製糸さんが現代の製糸業に取組んで頑張っておられます。

明治、大正、昭和初期まで製糸により繁栄したシルクの町岡谷は、戦後は東洋のスイスと言われる精密工業の町として繁栄しております。又近年近代化した日本の産業遺産を顕彰する社会風調も高まって製糸遺産の見直しの気風も高まってまいりました。

御静聴ありがとうございました。